

主 題：死人の生き方

聖書箇所：ローマ人への手紙 12章1, 2節

皆さんは、神が自分を見て喜んでおられるだろうかと考えたことがあるでしょうか？私たちが捧げる礼拝は神に喜ばれるものだろうか？とか…。私たちの人生に起こる様々な苦難、また霊的成長の欠如による様々な苛立ちがあるため、私たちの知っていることが本当に正しいのか、神は喜んでくださっているのだろうかと考えることがありませんか？

私たちが自分の生き方が神に喜ばれるのかどうかと考えている内はまだいいのですが、その内、この問いすらなくなり、単に礼拝に出席していさえすれば大丈夫だと思えるようになってはいませんか？また、このような奉仕をしているから…と、神のことは日曜日にだけ考えて、他の日は生まれた時から何ひとつ変わっていないような思いに満たされて生きる、このようなことがクリスチャンの中に見られるのです。このような人生のパターンに嵌っていきなら、クリスチャンは弱くなり苦しみ、喜びを失って行きます。なぜなら、クリスチャンはそのように造られていないからです。

前回、前々回に学んだように、クリスチャンは「罪に対して死んだ者、神に対して生きている者」です。それがクリスチャンの持っている現実です。「神に与えられた新しいいのちに生きる者へと変えられた」のです。今日は、この「神に与えられた新しいいのちに生きる者へと変えられた」私たちが具体的にどのように生きてゆくのかについて学んで行きます。

ローマ12：1, 2はこのことを簡潔に教えている箇所です。ローマ書に書かれていることを正しく理解して行くとき、救いに関して、聖い生き方＝聖化＝、また、神の栄光の姿に変えられること＝栄化＝の真理を理解して行くとき、それらを理解した私たちに、パウロは12章から「では、どのように生きてゆくのか」を教えて行くのです。

- 1) どのようなことをするのか
- 2) なぜ、それをしなければいけないのか
- 3) どのような者にならないといけないのか
- 4) どうすればそれを実践できるのか

この四つのことから学んで行きましょう。

☆私たちがどのように生きてゆくのか

自分自身を神にささげることの重要性、これを学ぶことによって、私たちは神の前に「生きる死人」として正しい生涯を歩んで行くことを願うようになります。このローマ12：1, 2はよく読まれている箇所です。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

はじめに「そういうわけですから」とあるのは、1－11章までパウロが教えてきたこと、それを基にして、ということで、これから新しい話題へと進んで行くのです。それは「私たちがどのように生きてゆくのか」ということです。12－15章に書かれていることを簡潔にまとめたのがこの12：1, 2なのです。順に見てゆきましょう。

1) どのようなことをするのか

「ささげる」とは、旧約時代の「いけにえ」をささげる行為です。これはローマ6章に繰り返して教えていることです。6：13「また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」、16節「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。」、19節「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」、12：1, 2はこの6

章に書かれていることと深い関わりがあることが分かります。そのひとつの例が「ささげる」です。ある人は、ローマ1章から6：14までで一区切りつくと言います。6：15－11：36はより詳しく説明するための挿入であると言うのです。そして、12章からは6：14までで語ったことをもう一度教えて行くのだと…。ゆえに、6：14から続けて12：1に入っても、そのままつながって読めると言います。「ささげる」は「今すぐ決心しなさい」ということばが使われています。ささげる行為をしなさいというのです。

●いったい何をささげるのか

「自分のからだ」です。「からだ」とは、6：12に「死ぬべきからだ」とあり、11節には「罪に対しては死んだ者…神に対しては…生きた者」、13節にも「あなたがたの手足を…あなたがた自身とその手足を…」とあり、私たちの肉体ではなく私たちの全存在のことです。私たちは新しいいのちにあって生きる者に変えられましたが、この肉体はまだ罪の影響を受けて生きる者です。ローマ7：5「私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。」、22－23節「すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいのに、23 私のからだの中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」と、このようにからだは罪を犯す、その影響をもたらすものと言います。私たちが人間としてもっている弱さ、罪深さ、罪をもっている存在としてのその汚れは、私たちのこのからだに象徴されるのです。また、このからだに属するものなのです。パウロはこの「からだ」をささげなさいと言います。私たちが焦点を合わせることは「からだをささげること」だと言うのです。

●どのようにささげるのか

「いけにえ」としてです。自分のすべてを神の前に「いけにえ」としてささげるのです。「いけにえ」とはささげられるもの＝からだ＝を指します。これはささげられるものが完全に神のものになることを意味します。もう私たちの所有物ではないのです。6：16－18でも「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であつて、あるいは罪の奴隷となつて死に至り、あるいは従順の奴隷となつて義に至るのです。17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、18 罪から解放されて、義の奴隷となつたのです。」と同じことを言っています。

キリストを信じる前は、罪の支配の中にあり罪の奴隷として歩んでいました。しかし、キリストを信じたとき、その罪の支配から解放されました。その後、自由になって自分勝手に生きる者になつたのではなく、義の支配の中にある者となり、神の所有物となつたと教えます。私たちがしなければならないこと、それは、私自身を神のものとして神の前にささげて行くことです。私たちの肉体、またこの肉体に付随している罪深い思いを、感情を、私たちが利己的に喜びを求めていること、私たちを満たすと勝手に考えているあらゆる事柄を、神にささげなさいというのです。そして、完全に私たちは神のものにならなければいけないのだと教えます。

2) なぜ、ささげなければいけないのか、その理由とは？

パウロが私たちに教え命じることは、神に私たち自身のすべてを余すところなく、感情においても、願望においても、あらゆる部分を神にささげるべきだということです。その理由を二つ教えています。

(a) 神のあわれみのゆえ

パウロが「お願い」していることは、自分を神にささげることです。「そういうわけですから」は、パウロがローマ1章から教えてきた神学的真理に基づいて「こういうことをしなさい」を表わすために使われています。パウロが教えてきたこと、それは神のあわれみです。ローマ3：21－5：21で、神は私たちをあわれみをもって義としてくださることを記しています。私たちが義と認められるとは、神のあわれみによるのだと言います。6：1－8：17では、救われた者として、神の前に聖い生き方をして行くことができるようになる、聖い者へと変えられて行くのは神のあわれみによるのだと教えるのです。8：18－39では、変えられて行く私たちは、いつの日か神の栄光を反映して、永遠に神とともに生きるのだという栄化についても、それが神のあわれみのゆえだと教えるのです。神が変わることのない私たちへの対応は、私たちの救いに関しても同じように現われることを教えています。たとえ、イスラエルの民が今、神に逆らう者であつたとしても、神がイスラエルの民に約束されたことを守られ、あわれみのうちに彼らを救われる日が来るのだと、パウロは教えるのです。それによって、私たちも神のあわれみから捨てられることはないことを学ぶのです。

このあわれみに関する教えは、ローマ11：30－32が特にクライマックスです。「ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であつたが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと

同様に、31 彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。32 なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。」、神が人を救うのは神のあわれみのゆえであると言います。それは私たちには不思議なことかもしれません。だから神はいいます。33 節「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」と。神はそのすばらしい知恵のゆえに、知識のゆえに、私たちにあわれみを示してくださり、私たちを贖い出して救ってくださり、私たちをきよい者へと変え、神に似た者へとしてくださる、その約束は途絶えることはないのです。

パウロはなぜ12：1で「神のあわれみのゆえに」というのでしょうか？ それはこの「あわれみ」を私たちが明確に理解するとき、その知識が神に対してもつべき献身的な願いをより強いものにさせるからです。ある注解者は言います。「クリスチャンの従順は神が彼に何をしてくださったかということの反映である」と。従順はクリスチャンの神への感謝のあらわれだと言うのです。また、カルビンはこのように言います。「人は神のあわれみによって、どれほどの助けを受けているのかを正しく理解するまで、心からの礼拝をささげたり、主をいとおしく思い、十分な熱意をもって主に従うことは決してない」と。パウロは私たちが奴隸的な恐れに縛られてではなく、自主的に、義を愛する喜びのゆえに、神を慕うために、私たちの救いの根源である神の恵みの魅力を思い起こさせようとしたのです。

同時にパウロは、私たちが御父のこれほどの恵みを体験していながら、その恵みに報いるために、この神に自分のすべてをささげることを努力して行かないとするなら、それは責められるべきこと、恥じるべきことだと教えるのです。

神のあわれみによって変えられた私たち、それゆえに、私たちは神を愛し、献身的に従って行くべきです。ささげなければならない二つ目の理由は、

(b) それが正当なこと、合理的なことだから

「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」と、私たちが自分のすべてを「いけにえ」として神にささげることは霊的な礼拝であるとパウロは言います。ここで注意しなければいけないことは、「霊的な」ということばです。これは直訳すると、「合理的な、正当な」という意味で、「考える」ということばから派生しています。つまり、パウロが言うのは、私たちが自分自身を「いけにえ」として神にささげることは、合理的な最も正当な礼拝である、礼拝の行為であるということです。これ以外に正しいことはないのです。「礼拝」とは礼拝の奉仕のこと、仕えるという意味があります。「ささげること」は私たちにとって最も合理的でふさわしい、神の前に仕えて行く方法だと言うのです。もし私たちが、神が私たちに成してくださったこと、私たちが神の前にどういう者であるのか、私たちのために神がどのようなすばらしいわざを成し、神ご自身の栄光を私たちの内に現わそうとしてくださっているのかを、十分に理解するなら、私たちがする最も正しいこと、合理的なことは「自分自身をいけにえとしてささげる」ことなのです。

故にパウロは、ローマ6：11で「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」と、自分自身について正しく考えなさいと言うのです。それによって、自分自身をいけにえとして神に完全にささげることが、最も正しいこと、ふさわしいことだと分かる、その願いが起こされて行くのだと言います。

もし、神に自分をささげることをしないなら、神について、自分について、正しく理解していないか、もしくは非合理的な不適正なことをしているかのどちらかです。クリスチャンとして正しく考えるなら「ささげる」ことを行なうはずです。

3) どのような「いけにえ」であるべきか

(a) 生きた (b) 聖い (c) 神に受け入れられる、このような状態でささげなければ、神に喜ばれないのです。神の基準に従うことが大切です。この「いけにえ」の特徴がどのようなものか見てゆきましょう。

(a) 生きたいけにえ

「生きる」とは「生きつづける、生きている、いのちをもっている」という意味で、6章で見てきたこと＝罪に対しては死んだ者、神に対しては生きている＝その「いのち」を指しているのです。肉体のいのちではなく、神によって与えられた新しいいのち、キリストを信じることによって与えられたいのちです。創世記22章では、アブラハムが息子イサクをささげるようにと神から命じられたとき、アブラハムはそれに従順に従いました。イサクも逆らいませんでした。しかし、神はイサクの代わりに雄羊を備えられたのです。なぜでしょう？彼らがすでに生きたささげものをささげたからです。アブラハムの心、イサクの思いを、神は良しとされたのです。

私たちが今まで生きてきた古いいのちは、神が喜ぶことをさせるよりも、自分が求めることをさせようと願います。しかし、パウロは言います。私たちがささげなければいけないのは、内側に新しく存在する、神が求めることを喜びとし、それを実践して行きたいと願う、そのいのちだと。

一つの例えを話しましょう。南米で海賊に捕まったある裕福な人が、奴隷にさせられてしまったとき、助けにきた家族は高額な身代金で彼を買い戻そうとします。しかし、その人はこう言います。「今自分は自由になりたくない、私がいなくなったら一体だれが救われた人を導くことができるのか、私の愛する兄弟姉妹はここにいる」と。彼が今まで生きてきたその裕福な暮らしを犠牲にして神に仕えたいと願うのは、新しいいのちが与えられている者がもつ特徴です。パウロはそれをもって自分自身をささげなさい、と言うのです。「罪に対しては死に、神に対しては生きる」とはこういうことです。

(b) 聖いいけにえ

神の目的のために取り除かれた、特に分けられたという意味です。同時に、道徳的、霊的に純潔を示すことばです。旧約の「いいけにえ」がそうであったように、私たちがささげるべきいいけにえは、神のきよさを反映しているものでなければならないのです。「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。」とペテロも教えます。このようであれば、神に喜ばれないと知るべきです。神が求めることは形式ではありません。心から純潔を追求するのです。

(c) 神に受け入れられるいいけにえ

「受け入れられる」とは、別の訳によると「とても喜ばれる」です。私たちがささげるいいけにえは神に喜ばれるいいけにえであること、私たちが新しいいのちに従って聖さをもってささげるいいけにえは、当然、神に受け入れられ、喜ばれるものであるはずです。受け入れられる「いいけにえ」とは旧約にたくさん教えられています。

ホセア書 6：6 「わたしは誠実を喜ぶが、いいけにえは喜ばない。全焼のいいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。」

I サムエル 15：22 「…見よ。聞き従うことは、いいけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」

箴言 21：3 「正義と公義を行なうことは、いいけにえにまさって主に喜ばれる。」

ミカ 6：8 「主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛しへりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」

また、神が忌み嫌われるいいけにえとは、イザヤ書 1：11 から見ればよく分かります。

「あなたがたの多くのいいけにえは、わたしに何になろう。」と、主は仰せられる。「わたしは、雄羊の全焼のいいけにえや、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。 12 あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、だれが、わたしの庭を踏みつけよ、とあなたがたに求めたのか。 13 もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙——それもわたしの忌みきらうもの。新月の祭りと安息日——会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。 14 あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、わたしは負うのに疲れ果てた。 15 あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。」

神はいいけにえよりも私たちの従順を喜ばれます。毎日の生活が私たちの礼拝なのです。

4) どのようにして実践して行くのか

12：2に教えられています。

(a) この世と調子を合わせてはいけません。

これは禁止令です。ここで強調していることは「もう止めなさい」ということです。「調子を合わせる」とは、「仮面をつける、マスクをかぶる」ということで、外面的にどのような表現をしているのかということを表わすことばです。これとよく似たことばが II コリント 11：13－15にあります。「こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装していますのです。 14 しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。 15 ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。」、にせ使徒は本物の使徒のようにふるまいます。サタンは光の天使のようにふるまうのです。「ふるまう」とは「調子を合わせる」ことです。また、「この世」は直訳では「時代」です。時間的観念を含みます。私たちが生きている今の時代に、調子を合わせてはいけないのです。なぜなら、私たちはもうこの時代には生きていないからです。私たちの国籍は天にあるからです。私たちのうちに存在する新しいいのちは、次の時代を生きるものなのです。

もし、私たちが自分の心にあるものに定めて集中し、それに傾倒してクリスチャンとしての責任を全

うしないなら、私たちは「この世と調子を合わせている」ことになるのです。たとえ、それが仕事であっても、また、何かの趣味であっても。

(b) 自分を変えること

これは「変えられなさい」という受け身です。変えてくださるのはだれでしょう？神、聖霊なる神です。パウロは言います。私たちは変えられることを聖霊にしてくださいなさい、と。そして、継続的に変えられ続けなさいと言います。イエスの「山上の変貌」でマタイはイエスの姿が変わったことを指して、このことばを使っています。マタイ 17：2「そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。」。これは、内側にある現実、すなわち「神」が外側に現われたのです。パウロが言うのも実はそのことです。私たちもキリストと同じように、新しい自分が外側に現われるようにしなさい、と教えるのです。内側の性質が日々の生活の中で実践されて行くようにと。

それをして行くために「心の一新」が必要だと言います。「心」とは「思い、考え、思考」です。新しい人として生きてゆくためには心の思いを変えて行くことが必要だと言うのです。故に、パウロは教えます。6：11「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」と。

私たちの考え、思い、その心というものは汚れているものです。ローマ 1：28に「また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。」とあるとおりです。私たちは救われたことによって、正しい考えをもつ者に変えられました。日々の生活において、正しく物事を判断しなさい、神がいわれることを正しく理解しなさい、それができるまで、私たちは自分自身を変えることはできないと教えるのです。自分の思いをみことばにある真理に基づいて考えることです。私たちは自分自身の思うこと、考えること、感じることのすべてを支配するべきです。それらが神の考えておられることから外れることのないように努力して行くのです。それによって、神のみこころを明確に知って行きます。そして、自分を神に喜ばれるものとしてささげることができるのです。

自分自身が神の前に正しくないことを、神を知ることの知識や能力的な欠如のせいにするのは、私たちが十分にささげていないことが原因です。

私たちが自分を「神に受け入れられる、聖い、生きた供え物」としてささげてゆくなら、霊的に成長して行きます。日々、自分をどのように神にささげてゆくのか、神が私たちに命じておられることは私たちにできることです。